# 総評

言語芸術朗読コンテスト審査員長　松本 健

第９回言語芸術朗読コンテストにご参加くださいましたみなさま、どうもありがとうございました。例年ですと表彰式の際に総評を述べているのですが、昨年に引き続き今年もその機会がなくなりましたので、紙面をもってそれに代えさせていただきます。

今年は社会状況が移り変わる中、「本審査」出場者には７月においてはマスクをしたままでの本学会場開催をお伝えし、８月になりますと録音音声による審査への変更をお伝えする運びとなりました。たいへん短い準備期間での対応を要請することになりましたが、13 名全ての出場者がハイクオリティなものを完成させてくれました。その努力と果敢な挑戦に敬意を表します。

一次審査の課題文は与謝野晶子の童話「いろいろのお客」でした。与謝野晶子が童話を書いていたことは一般的にはほとんど知られていませんが、実は我が子に読み聞かせるためにたくさんの童話を生み出していました。与謝野晶子の童話は「聞かせる」ことを想定して書かれたものといえます。一次審査では聞き手を意識しながらその展開や言葉遣いの面白さ、登場キャラたちの魅力を最大限に引き出してくれることが期待されていました。そして卓越した朗読でその期待に応えてくれた 13 名が本審査出場となりました。

本審査の課題文は朝井リョウ『少女は卒業しない』の「寺田の足の甲はキャベツ」という章でした。一次審査課題文の楽しい雰囲気とは全く異なる「切ない」課題文によって、また別の表現力を見せてもらいました。登場人物が同年代であること、地の文がモノローグであることが読みやすさと難しさの両面をもつことになり、「文章との距離感」に心を配ったことと思います。出場者の全員がそれぞれの表現力を発揮してくれたことによって、この課題文の世界が美しく色づきました。

審査の最終的な点数の分布を見てみますと、まずは一次審査と同じく「聞き手」に伝えることを意識した朗読であったこと、その上で規範的な朗読を超えた「自分の声」を伝えてくれるものであったこと、これらの相乗的な輝きが高い評価につながるものであったと考察できます。それでも各審査員から全ての朗読に対して、それぞれに孤高の価値が見出されていたことは間違いありません。これからも「自分の朗読」を探究し続けていってくれることが期待されます。

今年もみなさまには一次審査からたくさんの魅力的な声を届けていただきました。来年こそは福岡女学院大学の会場で本審査が開催されることと思います。みなさまのご参加を心よりお待ちしています。